



## 球児たちへの想い

会長 鈴木 末一

新型コロナウイルス感染症は、発症から約3か月が経過しようとしている。感染の猛威は世界中の国々に広がり、SARSやノロウイルスなどの比ではない。終息に向かいつつある、と発表していたWHO(世界保健機関)が、「(感染症の世界的な大流行)パンデミックとみなすことができる」と見解を転換するに至ったのに驚く。人類は、新型コロナウイルスの長期化を視野に入れ、対策強化に取り組まねばならないとの重大宣言だと感じたからだ。

東京五輪の年として、夢と希望に満ちた新年を迎えたはずであった。今やそのような気持ちの余裕などさらさらないのである。学校の一斉休校、それに伴い働く母親の就業形態の激変と減収、時差通勤、在宅勤務、外国人観光客の激減、観光産業などの甚大な減益、集団催事などの自粛等々、数え上げれば切りがないほど、日常のあらゆる社会活動がアブノーマルな状況に陥っている。

そのような社会情勢にあって、選抜高校野球は主宰関係者の熟慮の末、選手たちの健康面などを考慮して中止することになった。

ここで、高校野球に多少なりにも縁があるので、球児たちへの思いの一旦を綴ってみたい。

元巨人選手、松井秀喜が高校2年生の秋、和歌山県湯浅町の国民宿舎「湯浅城」で寝食を共にしたことがある。世界に名だたるビッグプレイヤーになるとは想像もしなかった。礼儀正しく、実直な高校生そのものだったと記憶している。次の夏の大会で、5連続敬遠四球を彼は体験する。それを甲子園のネット裏で目の当たりにした。試合後はもちろん、翌日からは陰悪な空気が球場の内外に漂い、四六時中緊張の連続であり、心休まることはなかった。この敬遠策

について彼は一切口にするのではなく、さわやかに球場をあとにした。

西部ライオンズの松坂大輔とは、オールジャパンの一員として、三国親善大会に参加していたアメリカ、韓国チームと一緒に奈良見物に来た時のこと、東大寺南大門でツーショット写真を撮ったことがある。やはり、高校2年生、夏の大会の後のことであった。

いずれにしても、選ばれた選手たちであるからだと言うわけではないが、純真な高校生であった。全国のすべての球児たちがそうだったと信じている。地方大会を勝ち抜き甲子園へ駒を進めてきた選手たちであるから、全国の球児たちの範とならなければとの自覚が、知らず知らずのうちに備わっていたことは確かであろう。

ところで、ソフトボール少年だった私が、31歳の時、ひよんな事から野球部長になった。そして顧問歴12年目、開校6年目のI高校の時、あと1勝まで駒を進めたが、甲子園の夢舞台に届かなかった。その経験から、閉会式などでの挨拶では、準優勝校への励ましの言葉に重きをおくようになった。球児たちと汗と泥にまみれた、練習や遠征試合の時のことが走馬灯のように思い出される。

選抜大会の出場が決まってから、甲子園でプレーしている姿をイメージしながら、開幕の日を待ち焦がれていた球児たちにとっては、中止がどんなに辛かったか、察するに余りある。そんな中、各校の選手たちが、「夏に向けて頑張ります」と、力強いメッセージを発信している。

私の独り言として聞き流してもらいたい。

初出場や46年ぶりなど、夢の甲子園球場の土を踏みしめられなかった球児たちに、出場の証となる名案がないものかなと考えてみた。夏の選手権大会が無事開催できたなら、開会式に選抜校の主将だけでも整列させてあげられないか……。思いは巡る。

それにつけても、WHOの長期化対策宣言は、胸に深く重くのしかかってくる。